

# 第 32 回 (' 22) 書学書道史学会大会

今年度の大会は、10月29日(土)・30日(日)の両日、盛岡大学(砂込キャンパス)において開催します。詳しいプログラムは3頁のとおりです。研究発表に加え、講演会を企画いたしました。多数のご参加をお待ちしております。

本状は大会当日にお持ちください。大会専用バスの利用時や会場入棟時に、会員の確認として使用する場合があります。

なお、本状の発送の後に、開催方法を変更する場合があります。最新の情報は学会ホームページでお知らせいたしますので、随時ご確認ください。またホームページには、本状のデータを掲載しますので、適宜ご利用ください。

## 10月29日(土)

- 12:00 受付開始
- 13:00 ~ 14:00 開会式・総会
- 14:10 ~ 15:15 研究発表
- 15:30 ~ 17:00 記念講演

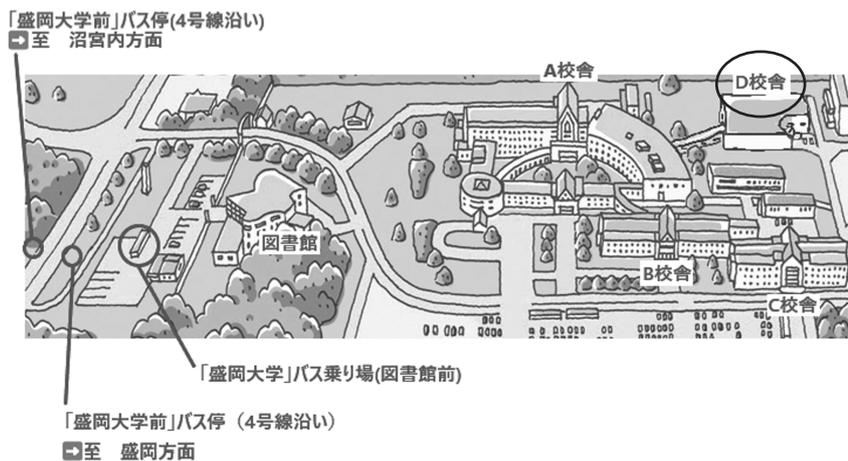
## 10月30日(日)

- 9:30 受付開始
- 10:00 ~ 12:00 研究発表
- 13:00 ~ 14:00 研究発表
- 14:00 ~ 閉会式・市内自由見学

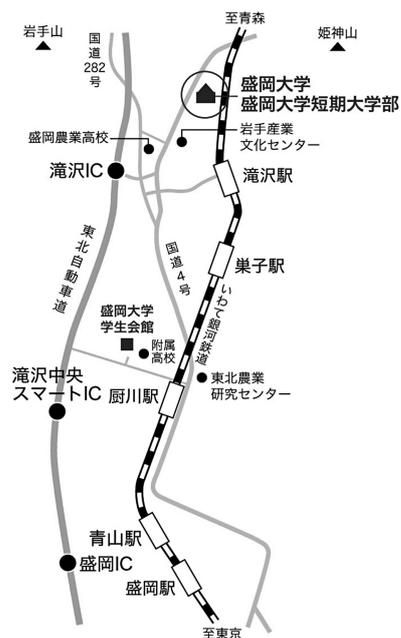


〈盛岡大学 砂込キャンパス D校舎〉

本年度大会会場の盛岡大学砂込キャンパス(岩手県滝沢市砂込808)へのアクセスは次頁のとおりです。



〈構内マップ〉



〈アクセスマップ〉

## JR 盛岡駅からのアクセス

### 大会専用バス

盛岡駅西口バスターミナル 27 番乗り場付近 ⇄ 盛岡大学砂込キャンパス B 校舎前

会員は無料で乗車できます。この印刷物を持参し係に提示してご乗車ください。

10月29日(土) 盛岡駅発 12:00 (盛岡大学着 12:40) 盛岡大学発 17:30 (盛岡駅着 18:10)

10月30日(日) 盛岡駅発 9:00 (盛岡大学着 9:40) 盛岡大学発 14:20 (盛岡駅着 15:00)

※役員・幹事の方で早めの到着が必要な場合には、路線バス、電車、タクシー等をご利用願います。

### 路線バス・電車

岩手県北バスで「盛岡大学」行または「沼宮内」行(所要時間約 40 分)。

IGR いわて銀河鉄道で滝沢駅下車(所要時間 15 分)。滝沢駅から路線バス乗り換え「盛岡大学」行(所要時間 8 分)。

※路線バス・電車の時刻表は、ホームページに掲載します。

タクシー 約 15 キロ

## 大会関係各種連絡事項

- 大会参加申込みは、必ず同封の「大会出欠はがき」に必要事項をご記入の上、10月14日(金) 必着でご投函をお願いします。
- 大会参加費(資料代を含む)は、同封の「払込取扱票」に必要事項をご記入の上、10月14日(金) までに納入してください。念のため、振込控えは大会当日にお持ちください。会費との合計金額の入金は禁止いたします。やむを得ず払込票を使用せず、口座に直接参加費を入金する場合は氏名の頭に「0」を付けて入金ください。
- 大会では、例年ですと、会員 1 名につき非会員 1 名の同伴を認めていますが、今大会では、非会員の同伴を認めません。
- 大会参加費は、一般会員が 2,000 円、学生会員は無料です。なお、今大会では、懇親会はありません。
- 新型コロナウイルス感染症対策として、大会 2 週間前からの健康観察をお願いします。当日はマスクの着用にご協力願います。当日、発熱・風邪症状のある方は、入構できないことがありますので、ご了承ください。コロナ対策の詳細はホームページにも掲載いたしますので、ご覧ください。
- 今大会では、やむを得ない事情で会場へ赴くことが困難な方(基礎疾患のある方、ワクチン未接種の方、体調不良が続いている方など)に対し、大会の模様をオンラインで配信いたします。この場合でも、一般会員には上記の期限までに参加費の納入が必要となります。オンラインでの参加を希望する方は、上記の出欠はがきとは別に、事務局宛(4 頁)に Eメールで、10月14日(金) までにお知らせください。
- 会場近くの飲食店が限られますので、お弁当の注文も承ります(1,000 円)。「大会出欠はがき」でお申し込みください(役員・幹事・諮問委員の方には別途用意いたしますので注文は不要です)。
- 宿泊ホテル等については、すでに会報でお知らせしたとおり、各自で手配していただくこととし、事務局では手配いたしません。

## 第 32 回 ('22) 書学書道史学会大会プログラム

10月29日(土) 12:00 受付開始 於:盛岡大学 砂込キャンパス D201

13:00 ~ 14:00 開会式・総会

14:10 ~ 15:15 研究発表 ※各研究発表の要旨は、5頁以降をご参照ください。

① 14:10 ~ 14:40 「自叙帖研究 一台北故宮本の諸問題と水鏡堂刻本との関係を中心に一」

丁子戌 (大東文化大学大学院) 【司会: 富田 淳】

② 14:45 ~ 15:15 「手指運動解析の書法史研究への応用について」

尾川明穂 (筑波大学) 【司会: 増田知之】

15:30 ~ 17:00 記念講演

「祖父・清六から聞いた 兄 宮澤賢治」

宮澤和樹氏 (林風舎代表取締役) 【司会: 矢野千載】

10月30日(日) 9:30 受付開始 於:盛岡大学 砂込キャンパス D201

10:00 ~ 12:00 研究発表

③ 10:00 ~ 10:30 「習字簡からみた後漢時代の書体認識の一端」

井田明宏 (安田女子大学) 【司会: 福田哲之】

④ 10:30 ~ 11:00 「近代朝鮮における女性書画家の誕生 一妓生書画家を中心として一」

金貴粉 (国立ハンセン病資料館) 【司会: 萱のり子】

⑤ 11:00 ~ 11:30 「河井荃廬の篆刻における中国古典の受容と展開一受容古典の拡充と作風の転向について一」

権田瞬一 (大東文化大学) 【司会: 小川博章】

⑥ 11:30 ~ 12:00 「久野錦浦の収蔵活動について」

下田章平 (相模女子大学) 【司会: 弓野隆之】

12:00 ~ 13:00 記念撮影・昼食

13:00 ~ 14:00 研究発表

⑦ 13:00 ~ 13:30 「棟方志功の文字と書の表現に関する一考察」

矢野千載 (盛岡大学) 【司会: 高橋利郎】

⑧ 13:30 ~ 14:00 「北京大学蔵漢簡『蒼頡篇』の分章に関する試論」

福田哲之 (島根大学) 【司会: 横田恭三】

14:00 ~ 14:15 市内博物館・美術館案内、閉会式 ※式後、市内博物館・美術館を自由見学

### 講師紹介 宮澤 和樹 (みやざわ かずき) 氏

1964年、岩手県花巻市生まれ。宮澤賢治の実弟、清六の孫。86年に立正大学を卒業後、イギリスでの博物館勤務を経て、94年に林風舎を開業、代表取締役(至現在)。日本橋三越「絵で読む宮澤賢治展」、NHK「賢治展 雨ニモ負ケズの心」、国立科学博物館「鉱物と宮澤賢治」等、宮澤賢治に関する多くの企画展で講演。著に『宮澤賢治 魂の言葉』(KKロングセラーズ 2011)、『わたしの宮澤賢治一祖父・清六と「賢治さん」』(ソレイユ出版 2011) 等多数。



## 大会に関する問い合わせ先

書学書道史学会事務局

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1 パレスサイドビル 7F

(株) 毎日学術フォーラム内 TEL 03-6267-4550 / FAX 03-6267-4555

Email : maf-syogaku@mynavi.jp

## 発表者への連絡事項

- 発表者の持ち時間は、30分（発表時間20分、質疑応答10分）です。発表に際しては、時間厳守でお願いします。
- 発表者各位においては、発表資料を **A3判両面印刷最大5枚まで**（複数枚の場合は綴じること）として **100部** をご作成いただき、10月24日（月）までに、下記の宛先へ送付願います。  
〒020-0694 岩手県滝沢市砂込 808 盛岡大学文学部 矢野千載研究室  
TEL 019-688-5555（大学代表） Email : yano@morioka-u.ac.jp  
※送付伝票備考欄等に「書学書道史学会研究発表資料在中」と記載してください。
- 今大会では、やむを得ない事情で会場へ赴くことが困難な方に対し、研究発表をオンラインで配信いたします。発表者各位には、オンライン用に、**発表資料のデータ（PDFファイル）** をご作成いただき、**10月24日（月）までに**、こちらは**事務局宛にEメールで**ご送付ください。
- 発表会場にはパソコン、プロジェクターを設置します。スライドをご利用の場合、資料送付の際に、その旨をお知らせいただくとともに、当日は **USBメモリー（PPTデータの他に、念のためそのPDFデータもご用意ください）** をご持参願います。ご自身のパソコン（有線・無線LAN接続可能なもの）をご持参いただいても結構です。試写は、研究発表前の空き時間を適宜ご活用ください。
- 各発表の司会者は、諸般の事情で変更が生じる場合があります。

## 役員・幹事への連絡事項

- 理事・監事・諮問委員各位**には、必ず同封の「**大会出欠はがき**」にて**理事会出欠のご回答**をお願いします。幹事各位にも、同様に**資料封入作業の出欠のご回答**をお願いします。いずれも昼食準備数を把握する関係上、ご回答にご協力ください。
- 理事・監事・諮問委員各位**には、**10月29日（土）11:00**より本年度第3回理事会を開催いたしますので、理事会開催会場の **D202** へご参集ください。
- 幹事各位**には、**10月29日（土）10:30**に事務作業を行う **D203** へご参集願います。資料封入作業のほか、受付や大会運営のご協力をお願いしますので、ご承知おきください。

以 上

## ① 自叙帖研究

## — 台北故宫本の諸問題と

## 水鏡堂刻本との関係を中心に —

丁 子 戌

何年にもわたった「自叙帖」の真偽論争の間、文献記録や摹写問題以外にも自叙帖上の多くの異常や疑問が指摘され、通説では台北故宫本は「真迹」ではないとされている。

本発表では、傅申氏を主とする先行研究で指摘のなかった問題、すなわち印文をはじめとする台北故宫本上のいくつかの不合理な点、台北故宫本と水鏡堂刻本の相違点のうち言及されていない点、その他の疑問点について考察する。

一、台北故宫本には一四箇所の切断部全てに騎縫印がある。うち本幅三五〜三六行目に当たる「夫草稟之作」の「作」字の一部は、第四紙と第五紙の切断部に重なり、「作」字上には騎縫印「佩六相印之裔」印がある。「作」字のほとんどは第五紙上にあるが、右に張り出した筆画のごく一部は切断ラインを越えて第四紙上に跨り、「作」字に欠損が無い。この異常に加えて、「作」字上の「佩六相印之裔」印は上下逆に鈐している。

二、台北故宫本と水鏡堂刻本三種・契蘭堂本・流日半卷本を比較し、さらに水鏡堂刻本二種にある「作」字を対比する。これを踏まえ、台北故宫本第四紙と第五紙上の字跡と刻本上の同字との筆画の違いや、台北故宫本・水鏡堂刻本・流日半卷本の押印順番から発見した押印の規律と規律の違いを説明する。

三、横幅と文字行数から字行幅（文字と左右半分の行間を合わせた幅）を割り出し、その差を明示して、台北故宫本の行数問題上の異常を説明する。また、本幅にある接縫箇所（痕跡や補紙記録がある第一紙と第四紙、第五紙の関連を推測する。

以上三点から自叙帖台北故宫本にある異常を解釈し、台北故宫本が水鏡堂刻本の母本ではない可能性、及び台北故宫本本巻が部分的（第四紙と第五紙）に入れ替えられた可能性を明らかにする。

（大東文化大学大学院）

## ② 手指運動解析の書法史研究への応用について

尾川 明穂

運動解析の技術発展に伴い、音楽などの芸術分野でも手指の巧緻性について研究が進められている。書においても既に教科教育の研究で運動解析が用いられるが、これらは現在の揮毫環境に照らして懸腕での運動を扱うものが多く、手指の細かな運動に注目するものはあまり見られないようである。歴代書跡は尺牘・碑刻など一字三センチメートル前後で展開されたものが多く、書論においても「寸以内、法在掌指。寸以外、法兼肘腕。掌指法之常也。肘腕法之變也」（鄭杓『衍極』）、「屋之大小、字之尺寸、各有程限」（夫小字及寸、必須實按其腕、而用在掌指。自寸以往、則勢局矣）（『衍極』劉有定注）などのように字径と執筆法の関係が断続的に説かれたことを考慮すれば、提腕による細字書写の手指運動も検討すべきかと思われる。

本発表では、まず、褚遂良（五九六―六五八）、顔真卿（七〇九―七八五）の楷書に注目し、書丹の際の手指運動について推定したい。これまで発表者は、褚遂良「雁塔聖教序」は寝かせた碑石の上で四つん這いとなって書いたものと想定し（「巨碑の上に花開いた「雁塔聖教序」の書法」『墨』第二三五号、二〇一五）、また、燕尾が明瞭でやや大字の顔書は、同様の体勢ながら着座位置に特徴があると想定した（「字径を中核的な発展要因とする書道史再構築の試み」『鹿島美術研究』年報別冊第三十七号、二〇二〇）。これらの想定に対し、機器を装着した被験者が原寸臨書することで、手指運動の合理性と、書風の再現性から妥当であるかを検証する。

その上で、様式研究や鑑定における手指運動解析の有効性について指摘したい。様式研究においては、字径とそれに応じた執筆法を中心に、いくつかの観点を提示してみたい。鑑定においては、従来議論の見られる顔書に焦点を当て、その書風が特定の執筆法により生じた可能性を導き、伝存する他の顔書や後世の臨書・做書との比較を通じてその位置を探りたい。

（筑波大学）

## ③習字簡からみた後漢時代の書体認識の一端

井田 明宏

後漢時代、特に桓帝期以降は、書体の変遷史上において重要な時期と言える。盛んに建立された漢碑の書丹には、それまで通行書体であった八分が使用された。正式書体となった八分に代わる新たな通行書体が整理されるとともに、旧来から通行書体として使用されていた草書は、筆跡の美しさや芸術性が求められるようになった。この書体上の変化は、文書行政を支える官吏たちの文字および書体に対する認識の変化と呼応することが推測される。これについて山元宣宏氏は章草の名義に関する考察の中で、「史書の指す書体の変化」と言い表しているが、後漢時代後期の書体の様相は十分に解明されてはいない。

発表者は、八分に代わる新興の通行書体について、後漢時代後期の書写資料である東牌楼東漢簡牘中の書信簡と陝西型鎮墓瓶の書法比較から、書写状況の差異を超える様式的共通性を見出した。これは新興の通行書体が官吏を中心とする人々の間で一定の認識を得ていたことの証左と言えるが、新興の通行書体の定着の実相に迫るには、より多くの資料を対象とし、様々な視点から考察を加える必要がある。

本発表は、文字習得の様が端的に表れる習字簡の書体および書法の年代的变化を分析し、特に桓帝期前後でどのような変化がみられるか、また、その変化は書体変遷史上にいかなる意味を提示しうるのかについて考察を試みるものである。

後漢時代の習字簡には、篆書、八分、草書、新興の通行書体などの書体が見られるが、桓帝期以降では新興の通行書体が習われている。これは、まさに明らかとした通行書体の様式が、習得の対象として認められていたことの表れと考えられる。さらに、桓帝期以降では八分、草書、新興の通行書体を同一簡中で習うのがみられる。後漢時代以前より、文字習得の際には複数書体の習得を求められていたが、その書体認識は桓帝期前後で異なることが想定される。新興の通行書体を習うことは、書体認識の変遷を示す一事象であるといえるだろう。

(安田女子大学)

## ④近代朝鮮における女性書画家の誕生

— 妓生書画家を中心として —

金 貴粉

朝鮮では一九一〇年以降、展覧会制度の導入や印刷技術の向上、書画売買システムの確立など、書画をとりまく環境が近代化されていった。それに伴い、それまで男性を中心とした書画家の中に女性が登場することとなった。

従来の研究では、近代以降導入された「美術」の枠組みで女性画家が注目されることはあっても、書画家として活躍した女性たちに着目したものは僅かであった。だが、二〇〇〇年代以降、歌舞や詩書画を教養に持つ芸妓である妓生を対象とした人物論やその作品論が成果を挙げつつあり、妓生を近代化の過渡期に生み出された存在と捉える否定的なイメージから、伝統芸能・芸術の担い手として肯定的に再評価されるようになり、男性中心であった書・書画史に新たな視点が加えられるようになった。

本発表では、それらの先行研究をふまえて、近代朝鮮において女性書画家がどのように誕生するに至ったのかという点について説明するにあたり、女性も入学が許された私設の書画学校や妓生が学んだ書画学校・教育について着目する。書画教育については近代朝鮮における初めての書画組織である書画協会の設立メンバーの一人であった海岡・金圭鎮と、一九〇七年に芸術を教授する教育書画館を設立した守巖・金裕卓の活動が特筆される。金裕卓は平壤の妓生学校において妓生を対象に書画を教えた美術教育者でもある。

彼らによって、どのように女性書画家が養成されていったのか、また彼女らがその後どのように活躍していったのかという点を本発表の主たる問題とし、その解明に向けて朝鮮美術展覧会等における出品作を分析対象とする。また、当時の新聞記事等の一次資料に基づき、当時の社会が女性書画家をどのように受け入れていったのかという点についても考察することにした。

(国立ハンセン病資料館)

## ⑤ 河井荃廬の篆刻における中国古典の受容と展開

## ― 受容古典の拡充と作風の転向について ―

権田 瞬一

河井荃廬（一八七一～一九四五）は、篆刻において中国璽印および清朝名家の技法を受容した作風を展開し近代日本の篆刻に新たな境地を拓いたとされる。発表者は、昨年の本学会大会において、荃廬の作風形成において根幹を成す鄧派（鄧石如、徐三庚、趙之謙、呉昌碩）をさかんに受容していた二十五～三十七歳時の刻印を対象とし、そこからみえる荃廬独自の篆刻表現を導き出した。検証の結果、この時期後半の作風は、鄧派の中でも趙之謙、呉昌碩の作風が色濃い倣古作品といえるが、二家の手法を踏襲しつつも荃廬風として昇華し、荃廬独自の統一感ある作風が形成されていることを指摘した。

この研究成果を踏まえ、本発表では三十八歳以降の作風について検討を行うこととする。先行研究の多くは四十七歳の作品、「日下東作章」および「比田井象之」の両三顆組印を頂点に挙げているが、これらの作品はむしろ三十九、四十歳頃すでに確立していた作風の同工異曲といえ、寡作な時期にあつて様々な古典の要素を取り入れながら感興に乗じて末筆の刀痕を露にした印だと発表者は考える。実際に前掲の「日下東作章」について、鳴鶴自身が「何年たつても刻しないあの河井君が珍らしく二日で刻した」と語っている。

三十八歳以降の白文は漢印に基づくものが多くなり、朱文は小篆、金文、古璽に倣つたものや界線を用いたものなど多彩な作風を展開していく。小篆の印の中には趙之謙、呉昌碩の字形を参酌しているものもあるが、横画の覆勢や縦画の背勢が強くなり、既に三十九、四十歳頃には、荃廬独自の篆刻表現に昇華されていることが確認できる。

本発表では、受容した古典との具体的な比較を通して荃廬の篆刻芸術における到達点ともいえる三十九歳～四十歳代にかけての刻印群の再評価を試みたい。

(大東文化大学)

## ⑥ 久野錦浦の收藏活動について

下田 章平

本発表は近代書画碑帖收藏史の研究の一環として行うものである。当該期の收藏史を体系的に理解するために、発表者は明治時代から現代までを暫定的に五期に区分した（拙稿「近代書画碑帖收藏史研究」、『アジア遊学』二六九、二〇二二、二七六―二八七頁参照）。本発表では、ボストン美術館の中国絵画コレクションや日本の関西を中心とする中国書画碑帖コレクションといった大コレクションが形成され、中国書画碑帖收藏史上劃期をなす第二期（辛亥革命から第二次世界大戦終了時）の当初において活動した書画碑帖の收藏家である久野錦浦（一八七五―一九一八）を取り上げる。

久野錦浦、名は元吉、字は錦浦、齋号は黄裳蓀、墨眇亭、広島県の士族の出身である。明治三二年（一八九八）六月に家督を相続し、西備銀行の支配人として活動し、また、京都に避居した羅振玉（一八六六―一九四〇）のコレクションを広島県下の同好の士と競って購入した。しかし、大正五年（一九一六）、西備銀行の経営破綻によつてそのコレクションは差し押さえられ、失意のうちに没した。ゆえに、收藏家としての彼の活動期間は、明治末年から大正初年のごく短期間であり、收藏家としての事蹟は今日ではほとんど知られておらず、加えて先行研究も備わらない。

そこで、本発表では、久野錦浦及び錦浦周囲の人物の書簡の分析によつて、彼の收藏活動の実態を説明することを目的とした。本発表での検討によつて、久野錦浦の收藏活動が明らかになるばかりでなく、彼の收藏活動の期間がごく短期間であることが却つて、彼が懇意にした博文堂（美術商）の初期の活動実態、初期羅振玉コレクションの伝播、さらに山本二峯（諱は悌二郎、一八七〇―一九三七）のコレクション形成といった、第二期当初の收藏史上重要な諸課題の解明に寄与するものと考えられる。

(相模女子大学)

## ⑦棟方志功の文字と書の表現に関する一考察

矢野 千載

青森県出身の棟方志功（一九〇三～一九七五）は周知のように版画家として大成したが、版画以外に絵画（倭画・油画）と書も制作した。志功の版画には白黒のもの以外に、裏彩色が施されたもの、作中に文字が画と同等に彫られたもの、そして画よりも文字に力点が置かれたものもある。

また志功は使用する文字へのこだわりが強かった。例えば、自身の作品制作の仕事を「芸業（げいごう）」、版画を「板画」、肉筆画を「倭画（やまとが）」といい、版画の題名には「柵」字を付した。

そして志功の書の形成については、富山県福光町に疎開中（一九四五～一九五二）における書家との交流も無視できない。この福光時代、地元（福光）の書家・表立雲（一九二六～二〇二二）や大澤雅休（一九九〇～一九五三）との交流があり、有志や中高生と「書の径の会」を結成した。なお、立雲によると、志功の手元には『書道全集』が東京から送られていたそうである。

帰京後の第一回棟方志功芸業展（一九五二）では、版画・倭画・油画と並んで書も展示した。そのことについて「書というものは、やはり、技巧でなく形態を見せるものでなく、心頭ほとばしるところから生まれるものでなくてはいけないと思つたのです。見られる形よりも、書かれる気韻を土台にして生動するものを見せたいと思ひまして、書を展覧会の中を含めたのです。」と自身の考えを述べている。

本報告では、志功の文字と書の表現について、実家が刃物・鍛冶屋であったこと、棟方家は禅宗（曹洞宗）で、神仏への思いがしみ込んでいたこと、また、青森風絵やねぶた絵が身近にあったこと、そして、民芸運動の柳宗悦（一八八九～一九六一）らとの知遇の影響等を考慮に入れながら、多数残されている板画の文字と書を手掛かりに、その特質について考察を試みたい。

(盛岡大学)

## ⑧北京大学蔵漢簡『蒼頡篇』の分章に関する試論

福田 哲之

『蒼頡篇』は秦の始皇帝期に作成された、史官養成のための学書である。漢代においても広く行われ、『説文解字』以前の小学書の成立に多大な影響を与えた。その後亡佚し、長らく実態が不明であったが、二十世紀以降、簡牘に書写された漢代『蒼頡篇』が相次いで出土し、実態の解明に向けて研究が進められてきた。

『漢書』芸文志によれば、『蒼頡篇』は当初、李斯作の「蒼頡」七章、趙高作の「爰歴」六章、胡毋敬作の「博学」七章の合計二十章からなるテキスト（二十章本）であったが、漢代に入って閭里書師が「蒼頡」「爰歴」「博学」の三篇を合わせ、一章六十字に区切って、全五十五章からなるテキスト（五十五章本）に改編し、『蒼頡篇』と総称したことが知られる。

これを出土資料に徴すると、木牘に書写された漢牘『蒼頡篇』（漢牘本）は一章（一板）六十字の一定した形式をもち、五十五章本の系統に属することが知られる。これに対して、竹簡に書写された北京大学蔵漢簡『蒼頡篇』（北大本）は、残存簡に見える章字数が百四字から百五十二字と一定せず、五十五章本とは系統を異にするが、資料上の制約により全体の章数が知られないため、二十章本との関係は不明である。

発表者は先に、北大本と漢牘本との比較分析をおして、「蒼頡」「爰歴」「博学」三篇の押韻がそれぞれ特定の韻部に属することを指摘し、それにもとづき漢牘本の章序（章の順序）について検討を加え、五十五章本の実態を明らかにした。これにより漢牘本（五十五章本）は、ほぼ全体的な把握が可能になったと思われるが、一方の北大本については、いまだ不明な点が多く残されている。

本発表では、北大本と漢牘本との本文の対応関係と両者の書写形式の相違に着目して、北大本の分章の復原を試み、北大本と二十章本との関係について考察を加えてみたい。

(鳥根大学)